

〔調査報告〕

キリスト教徒 X 女史のライフヒストリー

陳 力

I. はじめに

筆者は、中国人の1980年代以降の精神生活の変化に興味を持って研究を行ってきた。なかでも、当時、民衆の間においては、共産主義に対する信仰心が崩れ、人々は、それに替わる心を支える内面的なものを求めていたと思われる。しかし、その頃、中国には、実際、ほとんど宗教といえるようなものは存在していなかったのである。

1949年以後、中国政府は独自の宗教政策を展開し、宗教関係者は、それ以前のような宗教生活を維持することが次第に難しくなっていった。同時に、無神論の視点は、小学校の時点から、様々な形で教育システムの中に組み込まれ、新生世代の心の中には、宗教に対する嫌悪感、宗教関係者に対する不信感が育っていった。特に、民衆は、他の宗教に比べ、キリスト教に対しては非常に強い敵対意識を持っていた。キリスト教に対するこのような意識の発生の原因は、当時の教育によるだけでなく、1850年代から1910年代までのキリスト教と中国民間社会との間の関係、その融合度などを意識して考えなければならないと思うのである。

このような宗教、特にキリスト教に対する嫌悪・敵対意識は、文化大革命期に至り、頂点に達した。キリスト教＝外国スパイの図式は、文学作品・映画などでしばしばみられる。このような宗教に対する憎悪意識は、1970年代の後期まで根強く存在していた。そこで、人々は心の抛り所を求め、名目的には、「気功」をするためなどと理由を付けて、様々な報告会（集会）

に参加した。このような報告会の中身は、ほとんどが集団催眠術を特性とするものであったといえよう。このような状況を背景として、「超能力」に関連した話題は、新聞記事・文学作品・映画などに氾濫していたのである。

しかし、1980年代初期、改革開放政策が実施に移されてから、この状況は一変した。キリスト教徒は、爆発的に増えることとなったのである。当時著名な共産主義演説家の李燕傑は、しばしば、キリスト教のネタをその演説に盛り込むようになった。このことは、この時代キリスト教発展の姿を如実に示していると思われる。

ところで、文化大革命などによって、完全に宗教の空白地帯になった中国において、1980年代以後、宗教はどのように復活したのであろうか。このことは、この時代の人々の精神生活を理解するためには、非常に重要な問題の一つであると考えられる。

本調査報告は、現在中国に在住しているキリスト教信者に対するインタビュー内容である。信者の宗教生活の具体像を求めるのではなく、社会変動期における人々の心の移り変わりを探るのが主要の目的である。本調査報告の内容は、ほとんどインタビューの録音をそのまま書き下ろしたものであるが、一部宗教上の奇跡を強調する内容は、本調査の目的と関連性が弱いと判断し、このような部分は省略した。なお、近年、現地の政府関係者は、地下教会（国の承認を得ていないキリスト教信者組織）に対する態度において、かなり柔軟になってきたとはいえ、被調査者の安全を考え、一部の地名、人名、年代は伏せさせていただくこととした。

Ⅱ．X 女史のキリスト教の入信

私（被訪問者であるX女子のこと）は、1989年4月25日、主を信じるようになったのです。あれから、二十年が過ぎました。私はそれまで、主を信じていませんでした。ある日、大学に通っている娘に、「お母さん、一回教会を見に行つてはどうですか」と勧められました。実はそのとき、私は宗教のことはさっぱりわからなかったのです。私は、「教会とはなんですか、イエスとはなんですか」と娘に聞きました。あのとき、娘は、実はまだキリスト教の信者ではなかったのです。従つて、娘は、ただ信者たちはしばしば集會をし、一緒に聖書を読み、讃美歌を歌っているというようなことしか教えてくれませんでした。私は、そのようなことは、少し面倒なことであると思つていました。私は、仕立屋でした。娘は、大学に通つており、学費や生活費は相当高かったです。だから、集會に出る暇などなかったです、そのような暇があれば、お客様の洋服をつくるほうがいいのに決まつていると思つていました。だから「行かない」と断つたのです。宗教のこと、そのとき、本当に何も知らなかったのです。

私の母親の父は、キリスト教の信者でしたが、私の両親はキリスト教を信じていなかったです。従つて、両親から宗教のことはまったく聞いたことがありませんでした。1994年、母親は入信したのです。私の母親は、今90歳になりました。とても健康ですよ。94年、母親は、実家からこちらの私の家に来ることになりました。我が家に到着したその夜、すぐに入信したのです。

主人の家族には、キリストを信じる人はいませんでした。（1949年の）解放以前、主人の父親は、白虎仙（一種の中国の民俗宗教の神である——記録者）を信じていました。

私の母親の父である祖父は、6年間神学院に通つていたそうです。卒業してから、しばしば信者の集會を開いたようです。1940年代、日本人が来たとき、教会施設は焼かれ、その後集會

ができなくなったそうです。

私は、196X年、主人と結婚したのです。もちろん、お見合いでした。その時は、文化大革命の最中でした。宗教など、全く知らなかったのです。私の父親の従兄は、当時、丁度私の主人の同僚で、私のことを今の主人に紹介してくれたのです。伯父さんは、主人のことをほとんどといっていいぐらい何も話してくれませんでした。あのとき、主人は若かったです、すでに共産黨員になっておりました。私は、そのときは無神論者でした。神を拜むことなどなかったのです。

娘が教会の話をしてからまもなく、主人は、私に、「一回教会に行つて、話を聞いたらどうですか」と勧めました。25日の夜、娘は私を連れてXX大学に行きました。ある信者の家で集會があつて、私は信者たちが歌つた聖歌を聞いておりましたとき、すぐに涙がこぼれてきました。その場で、私は、入信しようと思つていました。集會が終わると、ある姉妹は私を呼びとめてくれ、いろいろと話をしてくれました。このように、私は、とても簡単に入信したのです。家に帰りましたら、主人は、漢方薬を煎じておりました。そのとき、私は、腰の病を患つていたのです。主人が煎じていた薬は、その薬でした。私は、すぐに主人に言いました。「もうその薬を飲みません。主は、私の病気をなおしてくださいと信じていますから」と。主人は、「薬は、一服10元もするのですから、捨てるのもつたないじゃないか」と言いました。しかし、私は、主を信じていましたから、主は絶対病気をなおしてくださいと思つたのです。その薬はもう飲みたくないと思つたのです。主人は、「その薬、10元もかかるから、飲まないのもつたない」、とうるさく言いましたので、仕方なくその薬を飲みました。そのあと、私の家は、もう薬とは縁を切ることができたのです。

私は、体がとても弱かつたのです。従つて、たくさんの病気を患つて、ずっと薬を飲み続けていました。今の私をご覧ください。とても元

気です。主は、私の病気を全部治してくださいました。

私は小さいときは、学校に行ったことがなかったです。主を信じるまで、読み書きもできなかったのです。今は、聖書を全部読むことができます、普段の生活のなかの読み書きも、大丈夫です。私は、入信して八カ月に経って、『聖書』をいただきました。以前は、自分で『聖書』を読みたかったのですが、読めなかったのです。最初は、うちの主人に字の読み方を聞きながら、独習しました。毎回聖書を勉強してから、「今日勉強した内容を覚えることができますように」、と主にお祈りしていました。今は何でも読めます。全部独習して身につけたのです。入信していた姉妹に頼るというよりも、主の導きをいただいて、自分で独習することができました。わからない字があれば、主人が家にいるときに聞き、主人が留守のときには息子に字の読み方を聞いていました。辞典を使い始めたのは、2000年です。誰にも教えを受けず、自分で辞典を使って聖書を読もうと思って、自分で辞典の引き方を覚えました。ほんとに不思議ですよ。これは、主の導きですよ。今、私は、もうリーダーとして、集会を開いています。集会の場所は、私の家です。かれこれ、もう20年経ちました。今は、新しい信者に『聖書』の講義をするぐらいになりました。我が家の集会には、しばしば20人から30人の人が来ます。そのなかには、大学生もいれば、高い学歴をもっている社会人もいます。誰でも、私よりきちんと教育を受けた方ばかりです。

1989年、娘は、「キリスト教の集会に参加しませんか」と誘ってくれました。しかし、そのとき、娘は、まだ本当の信者ではなかったです。娘の同級生のお母さんは、信者でした。そのとき、一人の大学の教授がいて、このX教授は1949年以前に入信した信者で、その後もずっとキリスト教を信じていたのです。文化大革命の最中にも信者でした。娘の同級生のお母さんも、その教授の勧めで入信したようです。娘

の同級生の母親は、私のことを聞いて、「是非、お母さんを集会に連れてきてください」、と娘に声をかけました。その結果、娘は私に集会に来るようにと勧めたのです。私が集会の部屋に入りますと、信者たちはちょうど祈禱をしていました。その後、聖歌を歌ったのです。その時、集会のリーダーは、読み書きできない女性でした。その時点で、この女性は、入信してまだ四年も経っていませんでした。集会にもう一人のおばあさんがいました。彼女は、相当前に入信した方でした。私は、そのとき宗教のことは何も知らなかったのですが、集会の部屋に入るやいなや、その集会にすぐに魅せられてしまいました。

主を信じるまで、私の人生は、とても苦しかったです。あの集会に出たとき、みんなは聖歌を歌いました。私は、歌詞の意味など全然わからなかったのですが、心の中では感じるものがありました。大粒の涙がこぼれました。あの時、私はまだ『聖書』を読むことができませんでした。『聖書』ももっていませんでした。八カ月経って、ちょうど主人は、用事があって北京に行きました。やっと北京で『聖書』を購入してきてくれました。しかし、私は読めませんでした。旧正月になって、私はX教授のところに行き、自分が『聖書』が読めない悩みを言いました。教授は、「読み書きできなくても『聖書』は読めますよ。神様は、絶対導いてくださいますから」、と言ってくれました。私より先に入信していたAさんは、少し『聖書』の読み方を教えてくれましたが、Aさんはよく「神様の導きがありますから、自分で読んでくださいよ。杖を使つてはいけません」と言いました。この話は、私にはとても印象深かったです。今、私が住んでいるあの小さい町でも『聖書』を購入できるようになりました。北京で買った『聖書』は、繁体字で20年近く読み、最近は簡体字の『聖書』を読んでいます。

最近、「福音書」（『聖書』のなかの福音書ではない、被訪問者の手元にこのような書物がないので、その内容は確認できていない——記録

者)も簡単に入手できるようになりました。しかし、私は、「福音書」を読まないです。だって、今邪教が多いです。私は『聖書』だけを読んでいます。この20年間のあいだ、私は伝道に頑張っています。私の話を聞いて30人前後の人が入信しました。その中の数人は、入信して一度退会し、その後また入信しました。お医者さんもいますよ。W先生は医者です。彼は、私の話を聞いて入信したのです。皆さん、やはり入信してよかったですと言っています。入信するとよく奇跡が起きます。近所の張さんの奥さんは、数十年糖尿病を患って、毎日、頭の上に石があるように頭が重たいと感じていました。張さんの奥さんは、何か悪霊が自分の頭の上にあると思っていました。だから、毎晩眠れなかったのです。三年前のある日、張さんの奥さんは、たまたま私の家の前を通ったのです。私は、彼女に「キリストを信じましょう。キリストを信じる人は霊など怖がらないです」と言いました。張さんの奥さんは、船乗りの娘さんでした。とても迷信的な方でした。私は、『聖書』の中の話を読んであげたり、讃美歌を歌ってあげたりしました。彼女が帰宅してから、私は彼女のために祈りました。その後、彼女は、日曜日の集会に来るようになりました。神様のお蔭で、彼女が救われたのです。今、以前のような頭の痛みは消え、病気は治りました。本当に奇跡です。

私は学校に通ったことがないですから、私には、『聖書』は難しいです。しかし、わからなくてもとにかく読みます。何回も何回も読んでいたら、そのうちに少しずつわかってくると思います。キリスト教の教義の基本については、私は自分なりに理解しています。もっとも基本的なことは、神様を怒らせることは絶対しないこと、嘘をつかないこと、神様を尊敬すること、神様の言われるとおりに行動すること、と思っています。うちの孫は、絶対に周りの子供と喧嘩をしません。神様は、愛です。博愛です。神様は十字架の上で私たちのために死なれました。私たちは、その愛をたくさんの人に知らせなければなりません。我が家の主人は定年になって

から、上海周辺で再就職しました。仕事は、皮靴を作る工場の工場長でした。そのとき、毎日多くの原材料の包装材が廃棄されていました。リサイクル業者はこの話を聞き、工場にやってきて、「オーナーに言わないから、それを安く売ってくれ、お金は全部あなた個人に支払う」と主人を誘惑しようとしてきました。私は、電話で主人に、「絶対そのようなことをしないで。神様が見ておられるから」と言ったのです。娘、息子も、仕事するとき、絶対にこのようなことはしません。

私が住む町は小さいですけど、立派な会堂を持っている教会もあります。しかし、私たちは、そこには行きません。あれは、政府の「統戦部」が作ったものです。「三自」教会と名乗っています。そのようなところは、不潔ですよ。私たちは、自分の家で礼拝します。週末(日曜日のこと——記録者)は、信者の家で一緒に礼拝します。

1949年以前、この地域にも多くの教会があったそうです。私は、その跡を見に行ったことはないです。だって、私にはわからないですから。最近邪教も多いです。XX功もありますし、宗教に絡む暴力事件もありましたし、私たちは自分の家で祈ります。一緒に集會する人もみな長い付き合いの人ばかりです。めったに外の教会へは行かないです。宣教のときも、特に気をつけなければならないです。人柄などを知っている人にしか、入信の勧誘などはしないです。一緒にしばしば集會する人はみないい方です。最も年配の方は79才、最も若い方は大学に入ったばかりです。しかし、最も多いのは中年層です。地元の役人さんや居民委員会のスタッフは、私たちの集會に干渉したことはないです。だって、私たちはいいことをしていますもの。

私たちは、宗派のことなどは知りません。主イエス・キリストを信じるだけです。何の派にも属していません。主は、キリストです。聖母のマリア様は、聖霊によって身ごもって、イエス・キリストが誕生されました。今、私は、『聖書』全部読めますよ。ちょっと読んであげ

ましようか。

イエス・キリストの誕生の次第はつぎのようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天子が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を生む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。（「マタイによる福音書」1章18-22章）¹⁾

あなた（記録者のこと——記録者）は、まだ信者じゃないですね。主を信じましょう。主を信じると奇跡が起きますよ。私は、いろいろな奇跡を見ました。私は、入信まで、病気がちでした。胃痛とか関節痛とか、痛くてよく泣いていました。今、完全に治ったのです。私の息子が赤痢になって、病院に行って注射を受けましたら、アレルギーで危篤状態になりました。血圧もない状態でした。そのとき、私は祈りました。私は、「もし神様が、我が子を今すぐ召されても、私はこれからも神様のことを信じます。もし神様が、我が子を救ってくださるのでしたら、後遺症のないようにお願いします」と祈りました。最後に、神様は、うちの息子を救ってくださいました。

神様が嫌われることを絶対にしてはいけません。うちの息子は、友達と商売をし、古代皇帝の肖像を売っていました。このような皇帝の肖像など、うちにおいてははいけません。私は、そのようなことは絶対だめだと息子に言いましたが、息子は、私の話を信じようとはしなかったのです。結局、そのあとすぐ、孫は重い伝染病に患って、息子も感電事故を起こし、二人と

も死にそうになったのです。実は、神様は事前に、私に警告をくださいました。私は、夢のなかで、なくなった親戚の夢を見ました。夢の中で、うちの息子はその親戚の体を動かしたのです。動かした途端、夢の中でその親戚の者はなくなったのです。これは、神様からの警告でした。

入信してから、確かに仕立ての仕事をする時間は少なくなりました。祈りには時間かかりますし、『聖書』を読みますし、集会にも参加しなければなりません。しかし、神様はいろいろな恩恵をくださいました。確かに、仕立ての収入は減りましたが、他の仕事の話が来まして、収入は減っていません。特に、うちの主人は、定年後すぐに再就職の誘いをいただきましたし、給料はとてもよかったです。神様は道を開いてくださいました。このような再就職は、私たちが探したのではなく、全部先方からの誘いです。これは、神様が我が家に恵みを与えて下さったからです。

他の宗教を信仰する人とは、論争しません。しかし、このような人たちには、神様のことを教えてあげます。このような人は、偽りの神を信じています、かわいそうですね。このような人のために、お祈りをします。論争や喧嘩はしません。神様が伝道の機会をくださるときには、主イエス・キリストを信じましょうと勧めます。

私は、唄は苦手ですが、よく讚美歌を歌います。この唄は、私は大好きです。聞きますか。

お金は私を満足させられない
地位は私を満足させられない
親類は私を満足させられない
両親は私を満足させられない
私の心の中の恐怖
それで消えられない
世の中は私を満足させることはなんですか

ただお主のご恩はこんなに美しい
私の生涯の最後の友
子供から少年へ、少年から白髪になるまで

私はイエス以外何もいらぬよ

私は譜面が読めませんが、集会のメンバーのなかには譜面を読める方がいます。その方から教わったのです。歌うたびに涙が出そうです。とってもいい唄でしょう。

Ⅲ X 女史の生い立ち

キリストを信じるまで私と私の家庭は、悩みがとても多かったのです。まず、私の実家には、とても複雑な家庭事情がありました。私の両親は、私が幼いとき離婚したのです。父の母であるおばあさんが、私を育ててくれましたが、このおばあさんも実は父親の実母ではなく、継母です。だから余り親しみは感じないです。おじいさんは、高齢で、子供の世話はできませんでした。私の父親は、15歳で結婚したのです。父親が16歳のとき、私が生まれたのです。母親は、結婚したあとすぐ病気になって、大変だったそうです。そこで父親の継母は、私の母親に対する不満があり、私の父親と母親を離婚させたそうです。離婚するとき、弟が生まれたばかりでした。父親は、そのとき、人民解放軍の兵士になりました。兵隊になって駐屯地に行きました。私は、父親の村に残され、母親とも離れ、おばあさんと生活することになりました。父親は、入隊してすぐに再婚しました。最初、継母は父親の実家に來まして、しばらく生活しました。1954年前後、都市で仕事が見つかり、父親の実家を出ました。1954年から1957年まで、私は弟と二人きりで生活しました。家はありましたが、空っぽでした。ベッドもありませんでした。私と弟は、床に寝ていました。1958年、父親と継母の間に子供ができました。共働きで子供を世話する人がいなかったため、私は、父親が住んでいる都市に行きました。私は、そのとき12歳でした。楽しい記憶は、ほとんどありませんでした。まず、継母はご飯を十分に食べさせてくれず、毎日お腹がすいて、目がくらんでいました。その上、継母は、よく私を殴りました。お

腹が空いて、もうそれ以上我慢できなくて、私は弟を背負いながら、毎日草刈りし、その草を売って少しずつ少しずつお金を貯めました。お米は高くて買えないですから、大豆を買うつもりでした。毎日頑張つて、やっと一斤(500グラム——記録者)の大豆を買うことのできるお金を貯めました。大豆を買って家に持ち帰ったら、継母に取り上げられてしまいますので、大豆を隠し、毎日握り拳に握られるぐらいの量の大豆をこっそり持ち出し、あるおばあさんに頼んでそれを煮てもらいました。当時、父親と私たちが住んでいた寮には、食堂がありました。家族のなかで、私だけは、食堂でご飯を食べるしかありませんでした。その食堂では、主食を買う食券と野菜料理類を買う食券を買うことができました。しかし、継母は、一度も、野菜料理を買う食券をくれたことはなかったです。それも、主食の食券は、一カ月12キロ分しかくれません。主食に油がないですから、12キロの主食は、お腹いっぱい食べられません。野菜も食べられませんでしたから。その大豆は、私にはとても重要な食材でした。大豆がなかったとき、毎日大抵蒸しパン二つ(蒸しパン一個は大抵100グラム前後——記録者)しか食べられませんでした。継母は、お湯もくれませんでしたので、水道水を飲みながら蒸しパンを食べました。たまに父親の同僚が不憫と思って、漬物やスープなどを買ってくれました。この食堂で食べることができたのは、父親の同僚のお蔭でした。父親の同僚は、私をあまりにも哀れに思って、私のことを記事にして壁新聞に出したのです。父親は軍人でしたから、私と弟に愛情がありますが、普段私のことを考える余裕がなかったのです。父親のところに行つたばかりのとき、家で継母と一緒にご飯を食べました。私の食事は、いつも薄いトウモロコシの粉でできたスープだけでした。継母は、料理を作つて主食と一緒に食べました。ある日、父親が帰つてきました。ご飯を食べるとき、私に、料理のなかの豆腐や白菜を箸で取ってくれました。継母はそれを見ると怒り、食卓の上の皿を全部床にひっくり返

したのです。あの時、父親は決して裕福ではなかったのですが、給料は人並みで、継母も人並みの給料をもらっていました。子供たちには、普通の生活をさせられたはずです。

父親の同僚は、しばしば私に同情し、月末、私には蒸しパンを買う食券がなかったとき、よく父親の同僚の皆さんは、1元5角のお金を集め、私にくれました。しかし、このことが父親に知れ、父親は大変怒り、そのようなお金を二度ともらうな、と私を叱ったのです。その時もらったお金は、全部返却せざるをえなかったのです。

大豆を食べたいとき、まず継母がいるかどうかを確認し、継母がいなければあの親切なおばあさんのところに行って大豆を煮たのです。塩もないですし、おばあさんは、自分の塩を少しくれましたし、たまに野菜もくれました。こういう状況ですから、学校なんかは通えなかったのです。父親は、私を学校に入れようとしたのですが、継母が大反対で、結局学校には行けなかったのです。

ある日、突然、継母は、家的大豆が盗まれたと父親に言いました。そのとき、私は家にいなかったです。父親はあちこちと私を探して、私は、見つけられて家に連れて帰られました、父親は、とても怖い顔をしていました。私は、家に帰ったらたぶん水もくれないだろうと思って、途中団地の共用蛇口で、お腹一杯水道水を飲んで父親と帰りました。家に戻りますと、私は殴られました。大きな棍棒で殴られました。殺されるのではないかと思って、私は逃げました。寮の一番前の建物には、父親の上司がいましたから、最初は走ってそこに逃げて助けてもらおうと思いました。途中後ろからレンガが飛んできて、私は一層自分が殺されると思ったのです。父親はなぜそのように怒ったのか、私にはわかりません。たぶん継母が何かを父親に言ったのでしょう。もう殺されると思って、結局、その日、私は家を出たのです。それは、1959年の夏でした。私が14才のときでした。

同じ町に、母親の兄弟がいました。まずそこ

に逃げることにしました。靴もなかったので、裸足で15キロ歩いてやっと着きました。家を飛び出したときは、午後三時前後。叔父さんの家にたどり着いたときは夜でした。そこに着くと、ちょうど母の父であるおじいさんもいました。叔母さんはとても優しくしてくれました。しかし、そのとき叔父さんは病気で、子供も多く、ずっとここで居候できないと思ったのです。最後に、父親の実家のほうに帰りました。

そのとき、私は、世の中の冷酷さがわかりました。父親の実家に帰ったら、ご飯を一口くれる人もいませんでした。おじいさんは、私のためにご飯をつくろうとしましたが、父親の継母は、「あなたの息子は、一銭でも仕送りしたことがあるのか」、と文句を言いました。ここには居られないと思って、私はご飯も食べずに父親の実家を出ました。もう母親のところには行くところはないと思って、母親のいる村に行きました。その村まで10キロの距離がありました。私は、道を知らなかったのです。歩きながら道を聞いて、やっと辿り着いたのです。そのとき、母親はすでに再婚していました。私と母親は、もう九年間も会ったことがなかったのです。しかし、母親は、すぐに私のことがわかりました。母親と一カ月ぐらい一緒に暮らし、私は、もう二度と父親のところには帰らないと決心しました。戸籍制度が厳しいですから、まず戸籍をこちらに移動しなければなりません。戸籍を移動するために、もう一度、父親と継母がいる都会に行きました。父親は、「戸籍を移動しないで、こちらに帰って」、と言いましたが、私はもう決心していました。都市戸籍を農村戸籍に移しました。母親としばらく一緒にいますと、母親のご主人が帰ってきました。私はその家でずっと暮らしたかったのですが、母親のご主人の父親は難色を示しました。仕方なく、私は、母親の親戚の家にしばらく住むことになりました。私は、本当に、母親のもとから離れたくなかったのです。

母親の親戚が私を受入れたのは、本当に私を助けるためではなく、それなりの打算があった

のです。私はそのときまだ14歳で、母親の親戚の子供は男子で、私と同年齢でした。母親の親戚は、私をその子供の「童養媳」(「トンヤンシ」と読む、未成年のとき労働力として家に来てもらって、成年後その家の男子と結婚させる未成年女性のこと、よく人身売買と関連がある——記録者)にしたいようでした。私は、まるで一つの地獄からもう一つの地獄に落ちた気分でした。その親戚は、私にはその気がないことを知って、私をその家から追い出したのです。母親にとっては、好意でやったことですが、最後はこんな形になりました。

そのときは、もう秋でした。当時はすでに、人民公社の時代でした。農業を営む人の食糧は、全部人民公社からもらわなければなりません。秋になると、人民公社は、公社の在籍者の一年間の食糧を各家に配分したのです。私の戸籍は、その親戚の家に入れていましたから、当然私の一年間の食糧もその家に配られました。しかし、私が出ていくとき、その親戚は、わずか1キロの食糧もくれませんでした。10月、この親戚は、私の戸籍を父親の実家に移しました。しかし、父親の実家の人民公社は、すでに食糧の配分が終わり、私に配分されるべき食糧はなかったです。11月になると、もう食べ物が、全部なくなったのです。世の中は余りに冷たい、生きていくのは辛すぎると思って、私は、川に投身自殺しようと飛び込みましたが、実にそのとき、母親は何かを感じて、私の後ろについて来ました。母親も、川に飛び込んで、私と一緒に死ぬことにしました。本当に悲しかったです。ちょうどそこに、人民公社の幹部がおられたのです。この幹部は、川に飛び込み、私と母親を救い出してくださったのです。11月は、とても寒かったです。そのとき他に服がなく、私は、まだ継母がつくってくれた服を着ていたのです。袖は、肘の下程度、ズボンも膝の下ぐらいいかない綿入れの服でした。救い出されましたが、綿入れの服はびしょ濡れになって、着替える服もなく寒くて死にそうになりました。そこで、一人のおばさんは、私をあまりにも不憫を

思って、私を自分の家に連れていってくれました。おばさんは、自分の服を私に渡してください、ここでやっと着替えができました。

実は、おばさんのご主人は、体が不自由で、おばさんの家は貧しかったのです。しかし、私を受け入れてくれました。そのおばさんの家に、一週間いました。私は、お金にちょっと余裕ができたのは、1980年代でした。その頃、母親に10元の仕送りをする場合、必ずこのおばさんにも10元仕送りしていました。仕立屋になってから、よく服を作って、このおばさんに差し上げました。このおばさんのご恩は一生忘れません。

そのとき、父親の前の同僚が、この話(入水自殺未遂)を聞きました。彼は、かなり離れている村に住んでいて、この話を聞いて10キロのお米を背負って、一日かけて歩いて、母親の住む村に来て、そのお米をくれました。こういう状態になっていることが分かっている、母親の再婚相手の父親は、なお私をその家に入れたいと言っていました。私には住むところがなく、最後には、人民公社の牛小屋で寝泊まりしました。もちろん、布団などありません。牛の食べる草の中で寝泊まりしました。一ヶ月後、父親の同僚がくれた10キロのお米もなくなりました。村の人から、食べ物をもらって、その後もまだ一カ月ぐらいは生活できました。

そのとき、養子縁組の話が来ました。私は、まずその家に私と同年齢の男性がいるかどうか確認しました。餓死しても、「童養媳」になりたくないと思っていました。幸い、その家はほんとに養子縁組したかったようです。私は名字を変え、その家の娘になりました。その家のお父さんは気性が荒く、とても怖かったですが、食事や衣服は、きちんと整えてくれました。

養子になってまもなく、人民公社は、女性に洋裁を教える夜間講座を開きました。学費も要らなかったのです。私は、その夜間講座で洋裁を学んだのです。読み書きできないですから、勉強のときは大変でした。数字も書けませんし、あらゆることを全部暗記して勉強しました。わずか二週間ぐらいで、私は服を作れるようにな

りました。他のだれよりも上手でした。これも、神様のご加護であると思います。

その家の養子になって七年後、縁談の話が来ました。縁談の相手は、今の主人でした。私は、もうそこを離れたくて仕方がなかったのです。紹介者である父親の兄弟の話を聞いてみますと、相手はきちんとした仕事をしていますし、そのうえ年齢も同じでした。私は、すぐに結婚することを決めました。一日でも、早くそこを離れたかったのです。

幸い、主人はとても優しい人です。主人と会って身の上の話をしましたら、二人の経歴は非常に似ていることが分かったのです。主人は、「私たちは、同じ藤にできた二つの苦瓜です。似たもの同士です。結婚しましょう。一緒に幸せになりましょう」と言って、すぐ結婚することを決めたのです。

今、孫もできまして、幸せの生活を送っています。これは全部神様のお蔭です。

むすびに

筆者は2009年から、1980年代前後の中国人の宗教入信のきっかけに対して幾つかの調査を行った。X 女史のような経歴を持っている人は心の支えが必要であるが、文化大革命前後、宗教の入信が不可能であった。1970年代後半になって、国の宗教に対する制限緩和によって、宗教は再び民衆のなかで広がっていたが、そのとき、入信者はそれほど多くはなかった。その原因の

一つとして、当時の民衆は豊かな生活のために一緒に懸命に働き、物的なものを求め、まだ精神的な支えを求める余裕がなかったことにあると思われる。X 女史の例もそうであった。その入信は家庭の経済事情が良くなったあとのことであった。インタビューのなかで、入信直前のその家庭に何らかの突発的な問題が発生することが確認できなかった。X 女史の入信は、その生い立ちにより、長期的に精神的支えを探し求めている要素と、経済的に豊かになって宗教生活を営む余裕ができた要素と、政府の宗教制限政策の緩和などの要素が複雑に絡み合い、最終的にそのキリスト教の入信が実現したのではないかとおもう。この考えを証明するにはまだ数多くのデータが必要である。

今後の課題としては、まず1980年代仏教や道教に入信した宗教関係者のインタビューを行い、データを蓄積し、1980年代前後の中国の社会と宗教発展の関連の特質を探りたいとおもう。

〔付 記〕

本調査報告は阪南大学産業経済研究所助成研究「中国社会における文化的基盤と宗教の構造」の研究成果の一部である。

注

- 1) この訳文は共同訳聖書実行委員会『新共同訳聖書』「マタイによる福音書」を参照、日本聖書協会発行。

(2010年7月9日掲載決定)